

## 四季の子ども ④

## 浮子の冬

川田学

(大学教員)

## 道具

瀬戸内海には大小多くの島々が浮かぶ。その島の幾つかに渡り、幾つかの幼稚園や保育所に伺ったことがある。子どもたちが、せつせと大型積み木や段ボールを組み上げて、あまり見たことのない形にし、その上で勇ましげに動き回っている。「あれは、何を？」と先生に尋ねると、「ああ、漁船です」「船に乗って、釣りに出ているんです」「この辺りは親が漁師の家が多いけん」。子どもたちの遊びは、生活を反映する。ごっこという形式は同じでも、内容は暮らしをなぞる。その子たちは、竿や網など、架空の道具を巧みに操った。

瀬戸大橋の快速電車に乗って、きらきらと光る内海を眺めていると、ふと島々が浮子に見えてくることがある。もつとも、そう見えてしまうのは、私の経験による。浮子は、私の子ども時代の節々に現れる、育ちのシンボルのようなものである。

浮子とは、魚信あたりを捉える釣り具の一つであるが、実に奥の深い道具だと思う。浮子がなければ、釣り人は常に竿を構えて、糸を張り、水面下の魚と向き合わなければならない。少し釣りをした

川田 学(かわたまなぶ)

北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかくする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』(ミネルヴァ書房)ほか。

ことのある人なら、これがいかにつらいことかわかる。この小さな道具のおかげで、釣り人は魚とのあいだに間を持つことが許される。ただし、魚の種類や環境によって浮子の形状や大きさは千差万別であり、適切なものを選び、それを正しく扱えるかが、腕の良しあしを測る。

浮子は、子どもの育ちや熟達の目安でもある。三歳頃のおぼろげな記憶がある。私は父と、多摩川の河原の池で、赤虫（ボウフラの一種）を餌に小魚を釣っている。浮子は、玉浮子という、直径二センチほどの球状のもので、最も初心者向きなもの。玉浮子に始まり、やがてセル浮子、唐辛子浮子、シモリ玉など、小学生の頃には相当な種類を使うようになっていた。冬の釣りでは、とりわけ浮子に神経を使う。寒いから、魚もあまり口を開けず、魚信が小さいからだ。

## 冬の遊びの過程

冬の遊びは、寒さとの付き合いでもある。昨冬、四歳の息子とソリに興じていると、突然「いたいっ」と叫びだした。その声があまりに大きかったので、盲腸か何かかと慌てた。しかし、痛いのは足で、すぐにしもやけだとわかった。公園の屋内に入り、ぬるいパネルヒーターに靴下のまま足をつけさせていると、やがて「かゆい、かゆい」と言いだしたので、安心した。

子どもはしもやけができるまで遊んでしまう。途中で、予防的に切り上げるということをしない。気付いたときには痛くて歩けなくなっており、大人に抱えられて、処置をしてもらう。洗面器にぬるま湯を張ってもらい、座って足を入れ、じーっと待つ。かゆくなくて、元に戻る。ほっとする。冬の遊びが含む一つの過程として、多くの人の記憶にしたためられているだろう。

雪や氷がモチーフの遊びに出会うと、私にはある経験が呼び覚まされる。小学校中学年あたり

から、釣りに本格的に熱中した。特にのめり込んだのがへら鮒がなであった。淡水魚釣りの中でも、最も繊細かつ道具に凝った釣法であり、十歳頃の少年を魅了する妖しい世界観があった。

へら鮒といえは、「へら浮子」と呼ばれる、意匠に優れた工芸品のような浮子が有名である。釣具店で購入することもできるが、クジヤクの羽根や萱かやのような材を使って自作するのが、正しい道だと思えた。プロに倣って、「水神」「葉舟」などと、漆で銘を打った。とうとう浮子の最高峰に到達したのである。

春夏秋には、釣りに同伴する友人も何人かいた。しかし、真冬になると、学校で釣りに誘うと目をそらす者が大半であった。それはそうだろう、氷点下に椅子に座ってじーっと浮子を眺め続け、五ミリにも満たない繊細な魚信を待つて、それでも一日数枚（へら鮒は「枚」で数える）上がるかどうかの釣りである。無理強いはず、真冬はしばしば一人で行った。電車を乗り継いで一時間、降りてから河原を一時間歩いて、好みの池に通いつめた。

池に着くと、びっしり氷が張っている。まずは、釣り場を定めて、石を投げて氷を割る。石を投げれば、当然魚は散ってしまう。氷を割った後は、しばらく待つほかない。家を出てから三時間以上たつて、やっと最初の浮子を入れる。ジンジンしてくる手足の指先を動かしながら一日浮子を眺め続け、しばれきった身体で帰途に就く。私は、こうした厳しい冬の釣りの過程が、なぜか好きであった。

中学に入ると部活が忙しくなり、釣りざんまいの日々から遠ざかった。中学二年の春先、久しぶりに、かの池に一人向かった。駅を降り、速くなったはずの脚で河原を行くが、一向に着かない。はて、久しぶり過ぎて場所を間違えたか。そんなはずはない、左岸の工場と、右岸の鉄塔が

見えるこの場所のはずだ。しばらくうろうろしてから、ようやく悟る。どうやら池は、埋められてしまったらしい。その日、その後どうしたか、まったく覚えていない。

### 発達が進む、季節は巡る

連載の初回に、「季節の子」として子どもと発達を考えてみたいと述べた。そのときは、それがどういふことなのか、自分でもあまりよくわかっていなかったと思う。しかし、筆が進むに任せているうちに、それは一つの形となってきた。季節の移ろいととも目前の子どもに接していると、不可避免的に過去の自分が現れる。その記憶と照らし合わせながら、渦中を生きている子どもについて言葉を選ぶ。そのことが、自分の経験の意味を構成し、また更新し続ける。

そのようなことは、いつでもできそうにも思える。しかし、季節の移ろいという平等な条件が、子どもと大人をつなぐ無二の契機となっていないか。それは抽象的な意味ではなく、入学式やトンボ、ドングリやしもやけのように、具体的な経験を伴ったものである。

個人の発達は、誕生から死へと向かう一方向的な時間の流れである。これに対し、季節は個人の生涯を越えて、円環的な時間を作りだす。何歳になったらできたとか、何歳児に適した遊びであるという子どもも理解とは別の次元で、その季節らしい遊びや出来事を、世代を超えて皆にもたらず。始めと終わりがあるために、急ぎ過ぎてしまうのが個人の発達であろう。だからこそ、巡る季節が運んでくれる、反復する発達の時間にも気を止めてみたいものだ。

— 終わり —



へらうき